

◆二四〇

棧敷（さじき） 女房御返事（にようぼうごへんじ）

建治元年（がんねん）五十四歳御作

与印東三郎左衛門祐信女房 1231p

女人（にょにん）は水のごとし うつは物（もの）にしたがう 女人（にょにん）は矢のごとし 弓につが（番）
 はさる 女人（にょにん）はふね（舟）のごとし かち（楫）のまかするによるべし、しかるに女人（にょにん）
 はをとこ（夫） ぬす（盗）人なれば女人（にょにん）ぬす人となる をとこ王なれば女人（にょにん）きさきと（后）
 なる をとこ善人（ぜんにん）なれば女人（にょにん） 仏になる、今生（こんじょう）のみならず後生（ごじょう）も をとこ
 によるなり、しかるに兵衛（左衛門）のさゑも（左衛門）んどのは法華經（ほけきょう）の行者（ぎようじや）なり、たとひ
 いかなる事ありとも をとこのめなれば法華經（ほけきょう）の女人（にょにん）とこそ仏は しろし
 めされて供らんに 又我（こころ）とこころを（発）をこして法華經（ほけきょう）の御ために御かた（帷）びら

贈
をくりたびて候。

法華經ほけきようの行者ぎようじやに二人あり

聖人しようじんは皮剥をはいで文字もんじをうつす

凡夫ほんぶは

ただ ひとつ一領つきて候かたびら

などを法華經ほけきようの行者ぎようじやに供養くようすれば皮をはぐ

うちに仏収をさめさせ給たまうなり、此の人のかたびらは法華經ほけきようの六万九千三百

八十四の文字もんじの仏にまいらせさせ給たまいぬれば 六万九千三百人十四のかた

びらなり、又六万九千三百八十四の仏 一一 六万九千三百八十

四の文字もんじなれば 此のかたびらも又かくのごとし、たとへばはるの野春の

千里せんりばかりに 草草のみにちて候そうらはんに すこしの豆ばかりの火を くさ

ひとつにはなちたれば一時いちじに無量無辺むりようむへんの火となる、此のかたびらも又かく

のごとし、ひとつ一領のかたびら なれども法華經ほけきようの一切いっさいの文字もんじの仏にたてま

つるべし。

この功德くどくは父母ふも 祖父母そふも 乃至無辺ないしむへんの衆生しゆじようにも をよぼしてん、まして

最愛

わがいとをしとをもふをとこは申すに及ばずと、おぼしめすべし、
おぼしめすべし。

五月二十五日

日蓮にちれん

花押かおう

さじき女房にようぼうごへんじ御返事

さじき女房とは

六老僧日昭の兄、印東次郎左衛門尉祐信の妻で、印東祐信の父を祐照、その妻の妙一尼をさじきの尼、嫁をさじき女房と称したと言われている。昔、印東氏が源頼朝の由比ヶ浜遠望のために山上に栈敷を構えた後に、居を構え住したことによるもので、地名に由来したもの

● 女人の境界は連れ添う夫によって定まることを教示

女性は求ぐ道どう（ ）心を害する、見た目は菩薩だけれども内心は夜や（ ）

又（しゃ）であるなどと言われ、その性質も三毒強盛にして、川のごとく曲がった心、曲がれ木の如しなどとされ、永く成仏できない者として嫌われ、やつと法華経で成仏を説かれた

当二世に亘って夫婦一体であるとの教えから、善人の夫に従う女人が現当に亘る成仏を遂げることが説示され、夫の祐信殿が善人たる法華経の行者であることから、女房も法華経の女人であり、即身成仏が疑いないと決定されている

「女人となる事は物に随って物を随へる身なり」（同 九八七頁）

★女人は夫に従っているように見えるが、実には従えている。自ら発心し率先して取り組む信行の在り方こそ大事であり、生活の中心をはっきりと自覚し実践できる婦人に。婦人が動けは皆が動く。その道理を実践した方こそさじき女房。手本としていこう。 ● 「上宮は手の皮をはぐ」（『開

目抄』五七八頁）聖徳太子が手の皮をはぎ、血を採って梵網經の外題を書いたことや、樂法梵士が身の皮を紙とし、骨を筆とし、血を墨として一偈を書き留めようとしたというもの。

聖人の行者Ⅱ雪山童子は半偈のために身をなげ常啼菩薩は身を売り善財童子は火に入り樂法梵士は皮をはぐ藥王菩薩は臂をやく不輕菩薩は杖木かうむり師子尊者は頭をはねられ提婆菩薩は外道にころさる

★樂法梵士や雪山童子は釈尊が過去世で修行していた時の姿

●帷は一枚ではない。

★この功德は自分に止まるものではなく、どこにでも行き渡る風のように無辺に開き、世界を浄化していく